
ただしイケメンに限る

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただしイケメンに限る

【Nコード】

N2356U

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

地味な彼女、久松美咲はある日突然彼氏ができる！？ その相手は足好きの変態なイケメン！ 調子に乗ったら挿絵が火をふく（ry

地味（前書き）

足好きなんです。ごめんなさい。

地味

「は？久松？ないよ、ない！可愛くねえじゃん」
それがスタンダード、だった。

ある日クラスで打ち上げ会に行くことになった。

「久松はどーせ地味な服なんだろうな」

「可愛いのもぜってえに合わねえよ」

待ち合わせ場所でゲラゲラ笑う男子たち。

まあ、来たのは本当にパーカーにデニムのパンツという地味な服だった。

それからというもの。

何事も無くクラス会は終わった。

「美咲！買い物行こ」

「え？今から？いいけど」

愛奈こと、三上^{みかみ}愛奈^{あいな}はクラス、

いや、学年一の可愛いこと謳われる。

会話のとおり、仲良しなのだ。

ついた場所はデパートの雑貨屋。

どうやら、お気に入りの雑貨でも買いに来たのだろう。

「向かい側の本屋にいてもいいかなあ？」

「美咲、本、好きだね。いいよ」

美咲はありがと、と小さく微笑んでいう。

そして本屋にかけていった。

（今はお金あんまり無いから、見るだけ）
辛いなあ、と苦笑する。

「うわっ！」

美咲が本屋に入ると、持っていた大量の本を崩してしまった人がいた。

「え、あと、大丈夫ですか？」

美咲が駆け寄ると彼は「だ、大丈夫だから！」
と言ってさっさと去ってしまった。

「？」

バレちゃう？

（それにしても、さっきの子、足綺麗だったな）

そう振り返る彼は、朝場^{あさば かずま}数馬。

所謂。

足大好きな、脚フェチ。

さっき拾うのを手伝おうとした　美咲を止めたのもこの本だ。
本には足のことしか書いてない、のではなく。

女性のファッション誌。

これ以上は色々な面で控えておこう。

ぽすん、と地味な音を立てて小さな手帳が落ちた。

「……生徒、手帳？俺の学校のじゃねえな」

拾い上げてみると、さっきの彼女、美咲のものだった。

「！！」

しゃがんだ寸前、落としてしまったのを間違えて拾ったのだ。

「……今から探すのもあれだしなあ。

この中学近所だし、明日届けよう」

「ない！！」

「どーしたのお？」

「手帳なくした！」

「明日誰か届けてくれるでしょ」

「だよねえ」

探せよ。

翌日。

早く出会わせたいから時間はやめるのやめろとか言わないで欲しい。

「……」

下校時である。

この大量の生徒の中からある一人を探すとなると、三年間通ってる生徒でなければ至難の技が。

「あの！」

突然後ろから声がかかる。

案の定。

彼女だった。

「あ、こ、これ……」

と、ぎこちなく手帳を渡す。

「ありがとうございますっ」

その笑顔で数馬はリリースした。

「あの、よければ、なんですけど……、今日お茶どうですか？」

「あ、いいですよ？」

「ひとつ、条件なんですけど」

「？」

「ショールパン、ニーハイ、あと、メガネで嘘つかず、に来てくれますか」

「バレて、ますか」

「ええ、まあ」

ペンとアイスとお買い物

待ち合わせのカフェ。

「……の、前。」

「……や、やあ」

「あの、どこか行く宛でもあるんですか？」

「え、ああ、決めてないな……」

「まずは自己紹介しましょう？」

「え、ああ、そだな」

「あたしは、久松美咲です。」

「美咲か。ため口にしているよ？俺は朝場数馬。」

「数馬、さん」

「数馬、って呼んでよお」

「え？！ああ、うん」

テンパって顔が二人して真っ赤だ。

行き先はショッピングとなった。

「……み、美咲って足綺麗だね」

（うわ、絶対セリフ間違えた。「セクハラ」って言われて帰られる）

「ほんと？そこしか自信ないからさー」

（顔も十分かわいいよ！なんでメガネしてるの？）

「文具屋寄ってもいいかなあ？」

「いいよ、あ、俺アイス買ってくるけど、何がいい？」

「ん、っと、チョコ！」

オーケー、と相槌を打って、彼はアイスの方へとかけていく。

（足舐めたいな）

（足好きならけってあげたいな）

「ふええ！？」

店内で大声を出してしまった美咲に注目が行く。

「あ、なんでもないです！すいません！」

（どどどーしょ！大好きなこのペンのこの色が売り切れ！？どーしょお・・・）

インクの残量を思い出す。

思い出し、少ないことを再確認して落胆する。

「うう・・・、小六からこれ通してきたんだよなあ・・・」

「そのペン俺持ってるよ」

「！ 数馬」

「うち来れば？」

「いいの？ ってアイスは？」

「金なかった」

ペンとアイスとお買い物（後書き）

親しくなりすぎてゐるわけじゃないよおおお

アイスと彼女（前書き）

恐縮です。

ごめんなさい。

アイスと彼女

「つめった」

ぺつとりと美咲の太ももにアイスが垂れた。
数馬の家のアイスである。

「テイ、ティッシュか何かちょうだい！」

床に垂れる前に拭かないと・・・」

すると数馬は話も聞かず足に手をやる。

「？」

そして顔を近づけ、足に垂れたアイスを綺麗に舐める。

「・・・・・・・・ツ」

アイスはとれたと言うのに、彼はまだまだ続けていた。

「ちょ、やつ、もお、とれたあぁっ」

目の前にあったクッションでばすばすと数馬を殴る美咲。
その動作が照れ隠しなのか。

可愛らしい。

「かつ、数馬あつ」

さすがに分かったのは寂しそうに離れる。

「ば、バカ！」

とそっぽを向く彼女だった。

変える美咲を見送ったあと、彼の母親が一言言ってきた。

「あの子だあれ？かわいい子ね。彼女？」

「ちっ、ちげえよ」

久松宅

（どーしよ。これからも付き合いもあるし、数馬と会う時だけメガネやめようかな）

と真剣に悩む美咲。

（どうせこれ、伊達メガネだし）

外したメガネをかたりと机に置く。

「美咲い？お風呂入っておきなさい」と母の声。

「はぁーい」

（まあゆっくり考えよ）

そう言って風呂場に向かった。

アイスと彼女（後書き）

俺妹5巻欲しいです

あ、なんでもないです。

転校生

「転校生？」

「うんっ！さつき会ったんだけどね、すっごいかつこよかったよお」
愛奈が言うんだし、相当なんだろうなあ、と美咲は思う。

「で、どのクラス？」

「うん？うちだよ？」

「……………」

じやなきや騒がないよ、とはにかむ。

朝学活

「相原です、よろしく」

あいはいらてつぺい
相原 哲平。

まあ、そこそこのイケメンであつた。

数馬に比べれば…………、とふと思つてしまう。

「ね、ねっ、格好いいでしょ？」

「そーお？」

「…………ぶー！美咲は朝場さんがいるからそお思つんだよお」
ぺしぺしと背中を地味に攻撃してくる愛奈。

そしてしまいには「ばあか」と吐き捨てて拗ねてしまう。

（お子様ね、もう）

はあ、と嘆息した。

（一目惚れしたならそーいえばいいのに）
無駄に勘がいいのだ。

告白

ここは屋上。

暑い夏でしかも太陽に一番近い場所だというのに今は風があるせいか涼しい。

「あの、早く帰りたいんだけど」

呼び出されたのはモテる愛奈でなく、美咲。

そして呼び出した相手は転校生であり、イケメンくんの哲平だった。

「．．．．．メガネ、とってもらえるかな」

「！」

咄嗟に一步後ずさる美咲。

（まさか、バレたとか！？）

かちやり、とメガネを直す。

「．．．．．嫌よ。ブスだから素顔は嫌いな」

「ふうん」

（何か証拠とかもってそうね．．．．．、ここは従うか？）

「ねえ」

と哲平。

「．．．．．」

美咲はメガネに手をかける。

「誰にも、言わないでね」と、メガネを外した。

「．．．．．ッ」

彼は口を抑え絶句。

よほどギャップに驚いたのだろうか？

「最初．．．．．ちよっと可愛くなって目を付けてたんだ．．．

．．．．．」

喋りだす。

そして「俺．．．．．」と言いかける。

「久松さんが好き」

「・・・・・・・・」

「返事はなんでもいいから、必ず、くれるかな」

「ええ、わかった」

「あ、あと」

「？」

そそくさと帰ろうとしている美咲。

美咲は哲平の方へ振り返った。

「可愛いのにどうしてそんなことしてるの？」

「・・・・・・・・・・あたしにも分かんないや」

夕日をバックにしたその笑みは

普段の彼女からは想像がつかないほどの綺麗な笑みだった。

相愛

家に帰ってから机の上にある携帯を手にした。
数馬に言わなきゃ、告白されたこと……。と彼女は思っていた
のだろう。

「・・・・・・・・って」

と自身でツツコミを入れた。

「ヤダヤダ何！？べ、別に報告なんて・・・・・・・・」
頬に手を添えつつ赤くなる。

そして、気持ちを安定出来たのか、ふう、嘆息して携帯を机の上に
静かにおいた。

ベッドの上に腰を下ろし難しい顔で考える。

（・・・・・・・・数馬^{あのヒト}はあたしのことどう思ってるんだろう）

その考えを打ち消すように首を振り、両手で両頬を叩いた。

階下からは母親の夕飯を知らせる声。美咲は「うし」と気合を入れ
降りていった。

結局。

夕飯の後、数馬にメールで告白のことを報告した。夕飯中ずっと悩
んだ結果である。

返信は気持ち悪いぐらい早く帰ってきた。
「ええっと、何々？」

『EEEEEE（、）EEEEEE』

それだけかよ、って突っ込みたくなった美咲。

がスクロールするうちに文章を見つける。

『今会える?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

タタタタ、と携帯を打鍵する。返信を打っていた。

『了解』

女子にしては端的な返信だった。

待ち合わせの場所は近場の公園。そこから彼の家に行くらしい。

「ど、どうしたの?」

「・・・・・・・・いや、ガキに先取りされちゃって悔しいなって」

「?」

「あのだ」

俺、お前が好きなんだ

返事は・・・・・・・・一応待つよ

「・・・・・・・・・・・・・・・・ッ」

耳まで真っ赤になる美咲。予期せぬ出来事があったのだから仕方ない。

「えっと、そのっ」

戸惑い言葉がうまく出てこない。

「あ、無理に言わなくていいよ」

「う、うん！いいの！今言わせて
すう、と一息。」

「あたしも、好きです」

我慢（前書き）

うちの子は一筋縄ではいかないみたいだ。
ちよつとR15つけとく

我慢

「い、今から家来れる？」

そんな数馬の問いに曖昧に応答する。 一応イエスなんだけど。

「ごめんね、夜遅く」

泊まってく？とはにかむ彼。 美咲は顔を真っ赤にして首を横に振った。

自分の部屋に入った二人。 数馬は美咲を自分のベッドに座らせる。

「はい」と持ってきた飲み物を渡す。 暑いせいか、グラスには水が数滴伝っていた。

「これ何？」

「麦茶。」

夏らしい。

よく見ると数馬はフロアに座っている。

「えと……」

「いんだよ、俺はここで」

「??」

“今の” 美咲には理解できなかった。

ふくらはぎにひんやりと何かが当たる。

「ひゃあっ!？」

「あ、ごめんっ」

数馬がグラスを当てたのだ。 グラスの表面にっていた水滴が足を伝う。

どうして当てたのかは知らないけど。

今度は数馬の手が触れる。

「・・・ッ!？」

「驚かなくていいよ、大丈夫何もしない」

(何もしないじゃなくて、して欲しくないよっ!あたし中学生ツツ)と心で叫ぶ美咲。 心で叫んだだけなので通じつはずがない。

数馬は手で触れるだけでは我慢できなかったのか、ふくらはぎに頬ずりしてくる。

(た、確かに足好きって言うてたけどお・・・)

夏のせいじゃない。 美咲は確実に顔が熱くなるのが感じる。

「ねえ」

「!」

数馬のいつもの声じゃない。 何かに取りつかれたような甘い声。

「俺、忘れられないんだ」

「?」

「アイスが垂れたときの」

美咲は突っ込みたかった。 変態か!？とか・・・。

今更後悔しても仕方ない出会ったときもう、フラグは立ってた。そう悶々と考えてるうちに数馬の顔はもう太ももにあった。

「ちょ!？」

そして“あの日”のような感覚。 何かが当たる。

「かずっ・・・、ひぁ」

足で感じるとかあたしも情けない、と心の中で泣く美咲。

「ん？」

何かだんだん数馬が上に上がってきている、と思う美咲。

「ばかつ!中学生だからね!？」

と思いつきり殴った。

「った!」

美咲の顔は真っ赤である。 今一番の。

「ケチだな」

「ケチとかの問題じゃなあーい！」

美咲はいつぞやのクッションを抱きかかえ拗ねた。

「じゃあキスしたら帰る？」

「ふーんだ」

とすねているが一応ねだる彼女。

そんな彼女に数馬は微笑みつつ軽いキスを落とした。

我慢（後書き）

（
・
^
）

バレた！

翌日

「おはよう」

いつもの美咲。だが、クラスは違った。

ガタガタツ、と男子が立ち上がり、女子は見る目を疑った。そう、今日は伊達のメガネを家に忘れていた。だから素顔の可愛い彼女だったのだ。

「ああああ！？メガネ、メガネがない！！」

今更気づく。そしてぺたぺたと自分の顔を触って確認する。

「ふええ、ど、どーしよお」

その声にその仕草に、男子は胸を打たれ、女子は戸惑う。

「……………数馬だ。数馬の家に忘れたんだ」

「あれー？美咲、今日忘れたの？珍しい、ていうか初めて！」

「もう、責めないで」

「昨日数馬さんの家いったんだあ？」

「……………ッ」

真っ赤になる美咲。そして小さく「そ、そーだけどあ？」と答える。

「数馬さんちよーっ喜んでたよお、はい、メガネ」

「なんで持ってるのおお」

がつくりと倒れ込んだ。今更バレてしまっているのにするのは白々しいのだ。

一人の男子が歩み寄ってきた。……………昨日の転校生だった。

「返事、くれるかな」

「……………ごめんね、あたし、彼氏いるんだ」

「えっ、いつの間に数馬さんとそんな関係に！？」

「べー、だ！おっしえなあーい」

授業中、昼休み、放課後と美咲への注目は学年へと肥大化していた。勿論、愛奈も一緒に行動したため周囲の目は更に大きなりつつあった。

同じ“可愛い”でも、愛奈の可愛いは人形のような愛くるしい可愛さ。

美咲は大人っぽい綺麗な可愛さ。

そんな二人が一緒に歩いているんだ、振り返らない人はいない。

そんな彼女、美咲が口にする一言は

「ああ、早く帰りたい」
だった。

「美咲い、ルーズリーフちょうだい？」

「ん、あー、はい！ってこれで最後か」

「うあ、ごめん！」

「大丈夫！今日買ってくる」

「……数馬さんとお？」

「もお、バカ！」

二人が会話しているだけでニコニコニヤニヤしている生徒だっている。それだけで満足なのか？

放課後

「ごめん、待ったか？」

「え？うつん、大丈夫」

「お前メガネは？」

「ああ、もうクラス中にバレちゃってさ」

あはは、と嘆息混じりに笑う。

「じゃ、行くか？」

「2」

バレた！（後書き）

まだ終わらせねえ

お買い物っ

「じゃ、行くか？」

「うん」

二人は手をつなぎ、歩き始める。

やってきたのは近場の本屋。数馬が本が欲しいと言っていたのを思い出したからだ。

それに本屋には多少の文具も揃えている（程度ではないんだが）。

「じゃあ、俺雑誌の場所にいるから」

「うん」

そう言って二人は個々の任務を果たしに動いた。

「ふわぁ、たかがルーズリーフされどルーズリーフだね」と感嘆する。

ずらりと並ぶ沢山のルーズリーフに驚く美咲。目がキラキラしていた。

そこでふと目にしたのがピンク色のもの。

『このルーズリーフで恋の手紙を書くと叶うかも！？』

美咲の顔が一気に爆発するように赤くなる。

「ね、ね、ね、願いなんても、もうかなってる、しっ！」
テンパって言葉がおかしい。

それでも美咲はいつもと同じのを買って、レジへ向かった。

「円になります」

「はぁーい」

ちやりんとお金を置く。　いつもと違うお店なので美咲は周りをキョロキョロしている。

「お客様？お釣りですが……」

「！？　あ、ああ、すいませんっ！」

と、レシートを受け取る。

「！　これなんですかー？」

美咲はレジのすぐ隣にあったイラストに目をやった。

「ああ、開店記念に俺が描いたモンです」

「へえ、可愛いですねッ！」

にぱあ、と無邪気な笑みを店員に贈る。

「……ッ、あ、ありがとうございますッ」

美咲は真っ赤になった店員を置いて「えへへ」と可愛く笑いつつ数馬のもとへ行った。

「かあ、ずま！」

「！　美咲」

「それなにー？」

数馬が読んでいたのは、ファッション雑誌。　今もそれなりに悪くない服装なのだが。

「もうちよつと読んでいいかな？」

「んー、じゃあ、あたしはアレだ、漫画見てくる」

「アレだつて……」

「出てこなかっただけですうー」

べー、と舌を出してぱたぱたかけていった。

お買い物つ (後書き)

アレだつてうつちゃったのは俺のクセです
そのまま引用しました。
ごめんね、美咲ィ

さい」

「なんなんですか、あなたたち……」

「お姉ちゃん、足綺麗だね？オレらとお茶しない？」

「ひへへ、そうそう、ねー？」

美咲は漫画のコーナーに入った瞬間店内の死角が出来、囲まれたのだ。

「……………」

その時感じた、数馬との違い。

ぴたりと誰かの手が触れた。

「きゃあ!？」

「おい声出させるなよ」

「すまーん」

違う……………。

……………誰か……………。

そう叫びたかった。

「何してんの」

聞き覚えのある声。 数馬だ。

「かず……………」

今にも泣きそうな、悲痛な声。

「俺の女にてえ出すなよ」

「っち、逃げようぜ」

「大丈夫？」

「……………うん。」

「そか」

立ち上がるうとする数馬の服の袖をつかむ。

「……あのね」

「うん？」

「あたし、あいつらに足を触られて分かったの」

「？」

「やっぱり、数馬が好きって」

「……クス、帰るか？」

「うん！」

美咲の笑顔は今一番、いや、それ以上の笑顔だった。

さいご（後書き）

終わらせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2356u/>

ただしイケメンに限る

2011年7月27日22時35分発行